

過去の想起はなぜ必要なのか：多文化主義の観点から

辻康夫(北海道大学)

過去にマイノリティ集団に対して行われた深刻な加害行為に対して、その清算・修復を求める動きが強まっている。これに応じて、各国政府や自治体、企業、大学、教会など、多様な団体が検証・謝罪・補償などを行うようになった。これにあわせて、過去の不正に注目しつつ、歴史を見直す動きも広がっている。他方で、このような動きに対しては、疑問や批判も提起されている。すなわち、無数に存在する過去の不正行為のすべてを取りあげることができないこと、過去の不正にこだわることで社会を分断する傾向をもつこと、過去よりも未来に関心を向けるべきこと、などの理由をあげて、これを批判する声も存在する。このように、過去の想起の是非は、今日のマイノリティ政策を論じるうえで、重要な争点になっている。

この問題を考えるうえで、はじめに、この問題がうまれる歴史的な背景を理解する必要がある。近代国家は、その形成と展開の過程で、多様な集団を内部に取り込み、その一部をマイノリティとして不利な立場においてきた。マイノリティ集団はしばしば二級国民として扱われ、同化政策や経済的搾取の対象となった。この状況下で、深刻な人権侵害や加害事件も発生した。20世紀末以降、マイノリティへの公平な処遇がめざされるなかで、過去の不正に向き合い、清算・修復することが求められるようになったのである。

過去の事件を想起する意味を考えるために、以下では、「構造的不正義」と、「持続する歴史」という考え方をういてみたい。「構造的不正義」という考え方は、政治哲学者アイリス・ヤングが定式化したものである。「構造」は、インフラ・産業・資産の分布などの物質的要素と、制度や社会的規則から構成され、人間の行為を条件づける。すなわち、それぞれの人間は構造の中の、特定のポジションに存在しており、それぞれのポジションに応じて、可能な行為の範囲を決められている。「構造的不正義」とは、社会内のポジションの間に著しい不均衡があり、一部の人々の人生が抑圧され、他人への従属を強いられている状態をいう。

このような構造的不正義のもとでは、弱いポジションにある人々への加害行為が発生しやすいが、この場合、加害の責任を問われるのは誰であろうか。第一に、加害を行った特定のアクターが責任を負うべきことは明らかであるが、これに加えて、第二に、被害者を脆弱な状況に追い込んだ「構造」が問題にされなければならない。この場合、社会に参加するアクターすべてが、構造の変革をめざして行動する責任を負うのである。このように、加害事件の責任は、個別のアクターと、社の構造の、二つのレベルで問われなければならないのである。

この考え方を、歴史に応用すると、次のように考えられる。特定のアクターの行為によって、「事件」がおこるが、その行為の背後には、「構造」が存在している。「構造」は「事件」

が生起する条件となるが、他方で「事件」は「構造」に作用し、これを維持したり、変容させたりする。ここで、「事件」は比較的短時間で終了するが、「構造」は、長期間にわたって持続することが多い。ここで、過去の「構造」が現在まで持続しており、過去の事件と同様な事件を、現在も生起させているのであれば、過去の事件は、過ぎ去ったものではなく、現在まで存在し、解決を待っていると考えられる。実際のところ、世界中で行われている過去の修復のプロジェクトの多くにおいて、現在まで持続する構造的不正義への対処が、念頭におかれている。これらのプロセスにおいては、不正義の認定、規範の確認、被害者集団と社会の和解などがめざされるが、同時に、このプロセスを現在の構造の変革につなげることが、重要な課題になる。

今日、歴史を想起することの重要性は、以前にも増して高まっている。今日では、露骨な差別的立法や、生物学的レイシズムがほぼなくなったが、マイノリティ集団への支配・抑圧は、多様な要素から構成される複雑な構造の中に、維持されていることが多い。このような抑圧的構造の淵源、作用の仕組み、責任の所在を認識するためには、その構造が形成・維持されてきた歴史的プロセスをたどる必要がある。過去の個別事件を焦点に、それを生起させた構造と、事件が構造に与えた影響を解明し、その修復を行うプロジェクトを積み重ねることは、現在まで持続する抑圧的な構造の是正に大きく寄与すると考えられる。

現代型レイシズムの特徴は、「構造的不正義」の観念を否定し、「歴史の想起」を拒否する点にある。この立場によれば、差別的立法や、生物学的レイシズムがなくなったことで、社会は平等になった、と想定される。ここから、マイノリティのおかれた苦境は、当該マイノリティの「自己責任」に由来するものと解釈される。そのため、社会の改革を求めるマイノリティの要求は、「特権」の要求として非難の対象とされる。このような抵抗をのりこえて、公平な社会を実現するうえで、社会の様々な場所において、歴史の想起と修復が行われることが重要と考えられる。